
Mistake!

水谷元行

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Mistake!

【Zコード】

Z3751F

【作者名】

水谷元行

【あらすじ】

駅の階段で激しくぶつかった二人はそのまま地面に激しく頭をぶつけてしまつ…病院で意識を取り戻した二人は入れ替わつてしまつた事に気づいて…

MtOF (前書き)

少しセクシャルな内容を含むやう予定…

俺は遅刻しそうになつて駅の階段を猛ダッシュしていた…

私は大学のゼミに遅れ、階段へ向かつて走つていた…
学ランを来た少年と大学生風の女性が、階段の最上段でぶつかつて
階段から一人とも落ちたんですよ、

私は、改札機室から見ていてかなり危険な落ち方をされているよう
に見たんです。

急いで階段まで行くと二人は丁度一番下まで転がり落ちて、学生さ
んが下、女性がその上に仰向けに積み重なるように倒れていきました。
近づいて見ましたら全く意識が無く、直ちに救急車を呼ぶよう階
段をかけ降りてくる同僚に依頼しました…

以上、駅員の社内報告

少年は階段から落ち地面に激しく後頭部を打ち付けた直後、一緒に
落ちてきた女性の後頭部を激しく前頭部にぶつけた模様ですね…た
だ、女性の方もかなり激しく頭を打つたようですね…

以上、駆けつけた救急隊員の報告

ズキッ！

『うつ、頭いた…』

ゆっくり目を開く…

なんだ？ここ？

真っ白い天井にシルバーのカーテンレール、カーテンレールには上
30㌢くらいが網になつてゐるカーテンが吊つてある…

誰かいる…

女性？白衣？でもナースっぽくない女医者か？

「西島さーん？西島結衣さーん？聞こえますかー？」

『え？何言つてんだよ？俺は沢井達だよ？何で女の名前で呼ばれんだよ？』

「沢井ですよ？！」

俺は耳を疑つた。

確かに喋つたのは俺なのに女の人の声で聞こえる…

「何を仰つてるんですか？西島さん？落ち着いて下さい。ここは病院ですよ？解りますか？」

あつ、そつか駅で階段から落ちたんだ俺！

「あの…一緒に落ちた人は…？」

?あれ？声がヤツバリ声がおかしい…

「大丈夫ですよ。

彼もかなり強く頭を打つてますが、あなた同様、脳に異常もないし、ただあなたをかばつて落ちたからまだ隣で眠つてるわ…

ではまた来ますからね。

「多分ショックによる一時的な記憶の混乱ね……」とナースと話しながら病室を出て行つた…

俺は中学一年の時に両親が事故で死んでから学校の寮に住んでいた。親戚も居なくて、祖父祖母も居なかつた俺は天涯孤独つて奴になつたが、

たまたま俺の通つていた学校が親友の祖父が学園長で寮に住まわし

てくれ、身の回りの面倒を見てくれた。 親友も今までと変わらぬ
てくれた…

そんな事をぼやつと思い出した…

意識を切り替え、ふと体を起こした…

何か距離感がおかしい、いつもと違う違和感がある…

頭を打つたせいかな…

部屋の隅に洗面台がある

立つて近づき、水を出す、手にすくつゝそのまま飲む、その勢いで

顔を洗う…

つってあつたタオルで顔を拭き田の前の鏡を何気なく見ると…

……？
……？？
……！
……！
……！

「なつ…？なんじやあ？」

「なつ…？なんじやあ？」 と白ジーパンの刑事のよくな
言葉が本当に自然と口をついてでた。

思わず、顔を触る。

手を見る。

女の人だよこれ！

胸に手をやる。

やつ、柔らかい膨らみが2つある…！…！

「ええ…？」

手術着の上から股関を押さえ…

なつない…

「おひ俺…女になつてゐ……？」

振り返ると俺が今まで眠っていたベッドの横にカーテンで区切られたもう一つのベッド

カーテンを引き、眠っている人を確かめる…

男だ、

布団をめぐるとなんとかこには俺が眠っていた…

まさか…

俺は俺に（？）

呼びかけた

「おこ…ひよつと起あひよ…ひよつと起あひつて

すると、そこそこ起つてこの俺（？）
はまを覚ました…

Ft o M (前書き)

MtoFやFt oMは本来異性化を望む方の意味
「男性から女性へもしくは女性から男性へ」
ですが、ここでは「異性に成っていた」と言ひの意味です。

「… わる… 起わひゆ…」

あれ…誰かが呼んでる…女性…
私?

しつかり皿を開ける。

間違いない。

私を覗き込んでいるのは私…

まさか、幽体離脱?

いや、まさかね…だつたら離れた体の方が立っているなんておかしいもの…

「もしかして、西島さんって…」

「はい… 西島ですが…」

あれ…? 風邪でも引いたかしら?

立っている私は何か考えると辺りを見回し、何処からか鏡を持つてきた…

「あの… 多分びっくりすると悪うんだ、俺自身だつてかなりびっくりしてゐる…」

と言つて鏡を差し出す…
受け取つた私は鏡を覗き込む…

誰?

結構可愛い男の子ね…

ちょっと良いかも…

?

?

!

……！……！

「わっ私？」

男の子になつてゐる？顔を見上げる…

「俺…沢井達つて言います。

高一です…」

私の顔が男の子の言葉を話す…

「私、西島結衣…大学二回生…」

あつ、そつそつ私駅の階段で男の子とぶつかつて彼、私を庇おうとして一緒に落ちたんだ、

「あの、落ちる直前私を庇つてくれたよね…？ありがとう…」

すると目の前の私…違う、

達くんは照れながら

「いやあ、でも結局、落つこちちやつたし、燒てたもんだから…
あつでも、これからどうしたら良いんだり…？」

困惑する私の顔…

じゃなかつた達くん…

私も同様に、

「そうよね…」

私…じゃなかつた達くんは

「そついえば誰も来ないみたいだけど…面会…」

ああ…

「私さあ、中学生の時に両親が事故で死んじゃって、親戚もいなかつたし、お爺ちゃん、お婆ちゃんもいなかつたから、友達のに居ることになったの

今は一人暮らしだから……」

私の顔の達くんは……

「俺と同じだ……」

聞くと彼同じ境遇で寮に住んでいた

でも……どうしよう……これから……

「ンンンン、ヒノツクする音が聞こえパーンクる私達……

「とつとにかく今は黙つてよつー」

「そーそうですね……！」

短時間で相談して……

ガラガラ、

「結衣ちゃん！大丈夫？」

小夜とおじさんたちが来てくれた……

向かっていくのは当然、

「結衣ちゃん大丈夫？」

私の体の所……

「あつだつ大丈夫……」少し、戸惑いながらも返す……達くん

小夜のお母さんが、私に

「あなた沢井達君ね？」

が階段から落ちた時に結衣ちゃんを庇ってくれたんですね？？？ありがとう

私も

「こつ、いや！結衣ちゃんと助けられなかつたでっし…
一緒に病院「じこ」ですか…

申し訳ありません…」

すると小夜のお父さんが、

「いやあ、さつき聞いて驚いたが、もし沢井君が居なくて結衣ちゃん一人で、あの勢いで落ちていたら死んでいたかも知れないと医者聞かされた、本当にありがとう」

「でも…」

「何だか君結衣ちゃんそつくりね！？」

「ははははっ」

笑う小夜のお父さんたち

「じゃ、私達は事務整理に行くから」と小夜を残して行つてしまつた…

病院特有の釣りドアが音もなく閉まる
小夜はじーっと私達一人を見て

「あなたは結衣じゃ無いわね？」

と私の体の方を指差した。

私はとつさに答えた

「何で分かったの？」

小夜は私の方に向き直つて

「あんた、私を誰だと思ってんのよ？」

私は

「秋桜院小夜」と答えた。

「ほりやつぱり、あんたじゃなかつたらそんな答えた方しないわ」と達くんが

「え？ しゅ……？」

上手く聞き取れなかつたようだ。

小夜は

「私、秋桜院小夜「シユウオウインサヨ」宜しくイケメンくん…あつ、今は結衣の中何だよね…？」

「ごめん」

ペロッと舌を出した。

すると、

コンコン！

また誰か来た。「はい？」

するとあまり音が鳴らないはずの病院の釣りドアを激しくドカッと鳴らして飛び込んで来た高校生。こいつちはイケメンメガネ男子…

「達」「タツ」！

タツ？

「何だよ？ 騒がしいな？」

と反射的に答える私の体。はつと口をふざき、

「ごめんなさい…」

「タツ？ お前タツなわけ？！」

「あついや違つ

慌てふためく達くん

「その慌て方タツそのものだな…どういう事だよ？

こんな美人に入れ替わつてるなんて…」

「俺が知りたいよ…まあ相手が美人なのは確かに認めるけど…後、タツは止めれ…」

私は

「そんなん」と両手を抑えて顔を赤らめる…

すかさず小夜が

「今はイケメンだけどね？」

あつ、そうだつた

小夜は

「良かつたわね結衣、イケメンパラダイスね明日から

私は少し考えて

「待つて…今の私じゃあ…B Lじやない！？B L！」

個人生活統括局（前書き）

今日は艶度低いです…しかし、次回から艶度up

個人生活統括局

さつき、女医の先生が来て精密検査のためにもう一泊する事になった。

「そう言えば、そこのメガネイケメンくん？君は？」
と小夜がメガネ男子にきいた。

「そんな呼ばれ方をしたのは初めてですよ・・・
大道寺流一〔ダイドウジリュウイチ〕と言います
して、宜しければお嬢様のお名前をお伺いしたい」と胸に手を当て、英國紳士のよつに礼をした。

小夜さんも

「これは失礼いたしました。

私、秋桜院〔シユウオウイン〕小夜と申します」

結衣さんが、俺の冷めた声を使って

「小夜お？変な芝居は他所でやつて？」

俺も、結衣さんの冷めた声で

「リュウ・・・お前もだよ・・・

小夜さんがやわしいから乗つてくれたけどね・・・

すると結衣さんが、

「あはは、達くん、そんなんじゃないよ

小夜も同じ系列の人間なのよ。」

小夜さんは不敵に笑つたが、表情を鋭くして、

「なんて冗談やってる場合じゃないわホント…」
りゅうも同調して、

「そりだな・・・隠し続けるのも無理があるしなあ
「学校とかどうしたら・・・？」

「多分、医者に言つても信用してはくれないだろうな・・・」コン
「コン、

あれ？もう誰も来ないはずなのに・・・？

「はい？」とリュウがドアを開けるとそこには一人の
SPのような黒ネクタイ黒スーツと言つ病院では敬遠される格好で
現れた

背の高い男性と小柄な女性の二人が立っていた。

リュウは

「どなたですか？」

女性が応える

「私ども、じつは物です」

と懐から警察のように身分証を見せた

「？俺はこんな所知らないぞ？」

そこには、《個人生活統括局》とある。

リュウは「どこのモンだ？国の組織ではないな？」

「国の組織ではないわ、そうねあなた達人の生き死にを統括してい
ます」

「とにかくお話を」と後ろの男が言つので、
迎え入れると、

女性のほうが「まず、沢井達の肉体の中にいる西島結衣さん、そし

て

男性のほうが、「西島結衣さんの肉体の中にいる沢井達さん」

女性「これは我々の責任です大変申し訳ありません」

小夜さんが聞く「それはどういつ事?」

「すなわち産まれた時から死ぬまでの皆さんの人生を記録し、アカシックレコードと言つてデータバンクに記録する機関です。」

するとリュウが

「アカシックレコード・・・」

聞いたことがある、そこにはこの世のどんな些細なことも記録されていふと云つて空想上のデータバンクでたしか一部がインドにあるって聞いたことがある」

「長々と説明ありがと」「やれこます」

頼むからそつち方向の返事はやめてください・・・

「そのA・レコードに記録ミスをしてしまって・・・同じ時間軸、同じ空間座標上に同じ状況で死亡するとお一人の欄に間違つて記録されてしまつて・・・」

俺は

「あの・・・良く分からんんですけど?」

女性は付け加えた

「まず、西島さんの場合、
地球時間軸日本基準で

西暦2008年10月15日水曜日7時43分26秒に

北海線千夜田駅西口の階段から転落、

3秒で地面に後頭部を強打して死亡

これが沢井さんの欄にも書かれてしました

「それが何で入れ替わりになるんですか？」
男性が説明する

「人は魂は頭部から抜けますが、
額から出るか、後頭部から出るかの
二通りがあります

お二人が転倒された際、恐らく沢井さんは額から
西島さんは後頭部から魂が抜けたものと思われます
この時、魂は新しい肉体へいくわけですが、
我々の方で分かっているのはこの時、本来
一番近い子宮へ向かいますが、
今回の場合、飛び出した瞬間、別の肉体
しかも、着牞性可能な状態の互いの肉体に
着牞性してしまったようです」

リュウは

「つて事はまさか・・・?」
女性は「そうです。

お二人は今や生まれ変わった
も同然なんです。
即ち、元には戻れません」

俺は正に青天の霹靂と言つ奴を感じた
結衣さんもどうやら同じようだ…

女性は続ける

「そして心配されている今後の生活ですが、幸い同じような」俺は正に青天の霹靂と言う奴を感じた…
結衣さんもびりゅうやく同じようだ…

女性は続ける

「そして心配されている今後の生活ですが、幸い同じような精神交代の事例が過去に七件、うち三件が男女の交代で、他の年齢差のある事例と組み合わせた対策案が…」

どこからか、めちゃくちゃな厚さのプリントの束を取り出した。

表紙に

【精神交代の対応について】とある

「これを呼んでも長いだけで訳分からないと思いますのでかいつまんで説明します…」

俺は慌てて静止した。

「まつ、待つてよいきなり沢山言われても困るよ
『簡単に言います

あなた方は一生その姿のままです。

学校は単位が行かなくても卒業資格を得れるよ」ひかりでしておきますしかし、こちらで出来る事は以上です。」

達くんの××、私が変わつてさせて貰うね…（前書き）

15禁としていますが内容は今回書いてこいつたり結構エロくなつちやいました…

何せ今回はふたりの×××がメインです…

しかし、今の所、全体的に所々、セクシャルの入つた、

トランスセクシャルラブストーリーになる『予定』です…

達くんの××、私が変わつてさせて貰つむ……

退院して、俺はとつあえず寮に戻つた。
部屋をかたづける。もつこじゆ居られないだらうと考えていた。

ピンポーン……

?

何も考えず、

「はーい?」と答えて玄関を見ると

「はあーい

そこには結衣さんがいた。

「ねえ? 私、提案があるんだけど…
荷造り? 丁度いいわ…」

俺は次の発言に耳を疑つた。

「一緒に住まない?」

「え?」

手が止まる俺……

すると後ろから抱きすくめられる……

「あたし、あなたと離れられない…
達くんもさうでしょ……?」

もうだめ…

欲望は完全に肉体に支配されてるみたい…
他の女性には理性が邪魔するけど…

あたしの体だから、自由にして良いと思つのかしづ…？

「「犯したい…」」

「良いわよね…」

達くんを押し倒して、ブラウスのボタンを外して、ブラのホックを外して押し上げる…

形の良い胸がフルンと露われる、私の中の何かを搔き立てる…

あたしの胸つて、男の目から見たらスゴくきれい…

ピンク色の乳首に舌を這わせる

「んっ、」

達くんは頬を赤く染め、唇を震わせる…

「あの…俺…その…初めてなんです…」

私は口を勃起した乳首から外して、

「初めて…？」じゃあ…

「あたしが、もらつてあげるわ…

あなたの童貞…」しかし、達くんはこいつ応えた…

「俺…今…女です…」

あつ、そつだつた…じゃあ私の田の前に居るのは経験の無い否処女…

私は田を細めて、

「じやあ、あなたの初体験…

つて事で…ね…？」私は震える唇に舌を差し込んだ

右手は胸の立つてるピンク色を優しく指先で転がしつつ、左手で腹部から徐々に下る…

?…あれ?

「ねえ?達くんスカートは?
ジーンズじゃ、脱がしにくいや…

「なんとなく慣れなくて…」

私はジーンズに両手を掛ける…

達くんは反射的に腰をよじり、イヤイヤをする…
どうやら欲求や体で覚えた事は、肉体からであるみたい…

「私じゃ嫌?」口には少しズルいけど女を使つわ…

「…………。」

達くんは頬をさうと赤くして拒むのを止めた…

男物のジーンズだったから脱がせば意外に簡単だった

ショーツはそのままだつたから今度は耳裏を責めつつ、左手を胸、右手をショーツに滑らせる…

自分の躰、

どじが『イイ』かはまさに手に取るよつにわかるわ…

すると達くんは私の來ていた制服のズボンのベルトを外し、ファスナーを下げて中からボタンとホックを外した。

「器用ね？」

「自分が着てた制服だからね…」

「やつぱり身体優先なのかな？身体の欲は…」

達くん両手でボクサー・ブリーフの腰を掴んで一気に引き下げる…
「自分が着てたからね…どう脱がせば早いか分かるよ
早く結衣さんがアソコを早く突きたてだい事もね…」お互の体を交換したもの同士はセックスの時、探り合いをしなくていい…

「でもあなたは時間をかけてゆづくじと感じたい…でしょ？」

「はい…

この身体に入つてから性的な興味が男にも広がつたみたいですね。
ただ、心は女性に興味がある…半々ですね…」

「私も…

ただ、肉体的に男は欲が強いみたい、好みの対象が女性の方が強いの…

ねえ、続けましょ…

「あひ……、おしゃべりは要らないわ……」

「あひ……、おしゃべりは要らないわ……」

私は自分の体の性感帯にキスの雨を降らせた

一方的に夢中になつて私の躰を味わい尽くす…

暫くして、達くんが起き上がり

「僕にもさせて下さー…」

とベッドまで私の手を引いて座り、私を自分の正面に立たせた

「む、無理しないで……あひ」

達くんはちゅうちょせず、自分のだつたモノをくわえた

「ねつねえ…大…丈夫な、の？」

私の腰元の位置で潤つた上目使いで応える…

うつ…、これね…元彼が言つてたのわ…

何かスッゴい狂るわ…違つた、来るわ…

達くんは舌も使いながら頭を前後に動かす…

ジュブツ、ジュブツ、ジュブツ…

あひ、あひ、あひ…ダメ

……

「あひ…、」

達くんは眉間にしわを寄せたが…

「「クツ、「クツ……」と私が出したものを飲み干した…

「「」ぬんね…」

「「につ、苦いんですね…
初めて知りました…」

私は彼を愛おしく思つた…

私は彼をベッドに沈め、最後までじりしながら責めていた部分に舌
を寄せた…

私は彼を愛おしく思つた…

達くんは慌てて

「あつ、そんなどこ舐めちやー…あつ…！
んんんっ…！！！」

達くんは身悶えながら、私の頭に手をあてがい搔き乱す…

私は一番敏感な部分を脣内で転がした…

「ん”つ、ん”ーつ！！！」

達くんは必死に声を抑えている。

「達くん…女なんだもの、

自由に声を出していいのよ?」私はパン生地にスクレーパーでつけ
た切れ込みのようなクレバスに舌を差し入れた…

クレバスはすんなり私の舌を迎えた
舌を使って肉体の芯を責める…

「もう、ダメ！
ガマン出来ない！
くださー……！
中に下れこー……！」

私は唇を引き上げ、一度達くんの頬にキスしてから…

「あなたの童貞…
変わりに私がさせてもうつわ…」

「あっ……！
あっーあっーあっーあっ……！」

もう達くんは声を抑えたりしない…

初めてオナナの出口「ビ」を感じて鳴き続ける達くん…

「あっーもうっー！
ダメーーこつちやーひーーひーー！」

「はあっ、はあっ、はあっ、私もっ、もうイク！…………！」

私がイクのと同時に達くんは一瞬躰全身を硬直させ、融解した後、更に躰全身を腰元を震源にビクビクッと痙攣した後ガクっと体をベッドに沈めた…

私達はふたりの余韻に浸つてベッドに横たわっていた…

達くんはポーっと天井を眺めている、

焦点は会っていないどうやら失神しちゃったみたい…

その顔を眺めていた私はさつきの話をもう一度聞いてみた…

「ねえ…私と一緒にいてくれない…？」

達くんはゆっくり振り返ってこう答えた…

「…妊娠したら責任とつてくださいね…」

私は

「もちろん、」と答えた…

襖（前書き）

襖が大変な事になる次話への話し…

奇妙な共同生活が始まった

とりあえずは何とか暮らしている…

つて言うのはウソで終始個人生活統括局

の人來てやつと落ち着いたのが、あれから3日後だつた
さすがに一人では手狭なので
新しい部屋を探し、やつと引っ越しを完了し、一休み中…

「あらかた片づいたねー」

「そりですね、とりあえずはこれで生活は出来ますね。」
とりあえず部屋振り分け型2DKと言えば聞こえは良いが、部屋は襖で繋が
つていて、部屋を見た結衣さんの第一声、

「夜が楽しみね…」

からかつてる?

からかつてるよね?僕の事?

とりあえず僕は襖をベッドで塞ぎ、部屋の配置を即席に整えた。

しかし、ベッドで塞いだ意味の無い事がその夜に分かる」とは知る
よしも無かった…

その夜、流一と小夜さんが遊びに来た。

引っ越し祝に流一は大吟醸を持ってきて

小夜さんは清楚な出で立ちで現れたが、引っ越し祝に『フランス人の帽子』と書いた袋を出した瞬間、

「あなたはそんなナリして何を持つてくんのー?」と頭を叩かれた

とりあえず、色々間違いのある引っ越し祝だったが、いざ、始めようとした時…

ピーンポーン

と呼び鈴が成ったので

僕は飲みかけたグラスを戻して席を立つた。

「個人生活管理局からお届け者です」

と受け取つたのは、やたらでかい寿司桶だった…

とりあえず、

「こんなん着た…」

とだけ言つてテーブルに持つて行つた。

寿司桶を置いた途端テーブルは役目が果たせるスペースが1/3に

成つた…

兎に角、その日はかなり盛り上がつたが、

夜、怖い思いをしたのはあの『襖』の事である…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3751f/>

Mistake!

2010年10月9日12時39分発行